

長岡大学茶道部 活動記録 (2012年度)



長岡大学ブックレット刊行にあたって



平成25年6月
長岡大学長 内藤 敏樹

私は、平成24（2012）年4月に、長岡大学の第3代学長に就任しました。この1年間、本学の教育・研究・社会貢献活動を進めるとともに、新潟・長岡地域の諸活動にも参加してきました。その過程を通して、あらためて、「長岡大学は地域に役立つ教育機関」をめざすべきことを強く実感し、長岡大学の教育等の活動内容を地域社会に発信するブックレットの刊行を再開することとしました。

そもそも、本学の建学の精神は、次の2つに表現されておりますので、本質的に、長岡大学は「地域に役立つ大学」を目指さなければなりません。

☆幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進

☆地域社会に貢献し得る人材の育成

本学は、この間の大学改革の流れのなかで、次の4件のプログラムが文部科学省の大学改革補助事業（補助金）に選ばれ、改革を進めてまいりました。

- ・平成18～20年度 現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）「産学融合型専門人材開発プログラム－長岡方式－」
- ・平成19～21年度 現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）「学生による地域活性化提案プログラム」
- ・平成19～21年度 社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム
「長岡地域産業活性化のためのMOT教育『イノベーション人材養成プログラム』」
- ・平成21～23年度 大学教育・学生支援推進事業【テーマB】学生支援推進プログラム「学生の3つの就職力一体形成支援プログラム」

こうしたプログラムによる教育改革を経て、現在、一言でいうと、＜産学融合教育プログラム＞を進化させ、＜専門能力（資格対応型専門教育）+社会人基礎力（産学連携型キャリア開発教育）＞を身につけた＜地域が求める人材＞を養成しています。その結果、就職内定率も大変すばらしい結果（平成25年3月卒業生は99.0%）を生んでいます。

私は、常々、大学全入時代を迎え、地方の大学は「魅力」を出し地域に評価されていかないと生き残れないと思ってきました。地方の、小さな大学ができることのひとつが「地域活性化」だと思います。都会のマンモス大学にはできない地域活性化策を具現化することで、地域の産業・企業や地域社会の方々へ＜長岡大学の卒業生は使えるね＞とか＜役に立つね＞という評価を頂けるよう、大学挙げて地域との協働を進めて行きたいと考えています。

この長岡大学ブックレットは、本学の教育の様々な特徴ある取組をご紹介する媒体ですが、私としては、以上の趣旨を踏まえて、この「地域活性化」の取組を中心に、刊行していきたいと考えます。ブックレットをご一読いただければ、長岡大学の地域活性化の取組がわかり、地域との協働の姿が浮かび上がるよう、継続的に刊行して行きたいと考えます。そして、このブックレットの内容に関し、企業や地域の方々からどしどしご意見をいただき、情報交流を活発にし、取組の改善を図って行きたいと考えます。ご感想等どしどしご意見ください。ご連絡先は次の通りです。

☆ご連絡先 TEL 0258-39-1600（代） 担当：総務
E-mail info@nagaokauniv.ac.jp

長岡大学茶道部 活動記録 (2012 年度)

目 次

はじめに	小川 幸代	1
1 朝日茶会	外山 明代	5
2 まちなかキャンパスの茶会	山田 絵美	6
3 納涼茶会	外山 明代	7
4 杜々の森名水茶会	田村 理恵	8
5 長岡市民茶会	住谷 瞳	9
6 裏千家淡交会青年部 第45回北陸信越ブロック会員大会	齋藤 美如	10
7 悠久茶寮	小幡 陽生	12
8 学生・生徒交流茶会	小幡 陽生	13
9 平成24年度 第50回学生茶会	田村 理恵	14
10 クリスマス茶会	山田 絵美	15
11 初釜	山田 絵美	16
12 送別茶会	山田 絵美	17
おわりに	小川 幸代	18
2012年度活動実績 (一覧表)		
写 真		



長岡大学教授
茶道部顧問 小川 幸代

茶道部の現状

本冊子は、長岡大学茶道部の2012年度における活動のうち、茶道部が開催した茶会と部員が参加した茶会について書き綴ったものである。2013年10月現在、部員は14名いるが、12回に及ぶ内外の茶会について分担執筆したのは、山田絵美（3年・部長）、外山明代（3年・副部長）田村理恵（3年・副部長）、小幡陽生（3年・マネージャー）、住谷瞳（4年・前部長）、斎藤美如（2012年度卒業生・元部長・現在、まろう食品株式会社勤務）の6名である。

部活動は、茶会の開催と参加だけではなく、日ごろの稽古あつての茶会であることはもちろんである。茶道の講師を迎えての稽古は原則毎週1回、学生だけで稽古をしている日が毎週1回ある（両回とも見学可）。ほかに、外部のセミナーに参加することもある。2012年度のセミナー参加は、「2012年度活動実績」（19ページ）に示した。セミナーに参加するに当たっては、茶道講師による強化稽古、自主稽古の増加などの準備をする。連泊のセミナーに参加する場合は自分で着物の着脱をする必要に迫られるので、日ごろから着付けは自分でできるように訓練している。

茶道部の転換点

茶道部の学外での活動が増えてきたのは2011年からで、この年の夏（7月21～24日）、裏千家学生セミナーに本学から3名の学生が初めて参加した。この、京都にある裏千家宗家の学生セミナーへの参加は、以前にも希望していた学生がいたものの、この時期は本学の前期末試験と重なるので実現できなかった。それが、2011年度からの学年暦変更（前期試験は9月初旬になった）に伴い、実現可能となった。おりしも2010年の6月、長岡市蓬平温泉を会場に裏千家学校茶道指導者研修会が行われ、本学茶道部の学生が呈茶をすることになった。その研修で京都から来られた宗家の上役の方から、セミナーにいらっしゃいとお声を掛けていただいたことが、学生の、セミナー行き願望に拍車をかけたのである。

長岡から京都のセミナーに参加するには、参加料に往復の交通費と、多額の費用が必要だが、本学には「ヒューマン・パワーアップ・プロジェクト（長岡大学公募型人間力育成奨励金）」という、学生を支援する制度があり、応募書類、公開プレゼンテーションを通過して、参加料から食事代を引いたぐらいの助成金を受けて行くことができたのである。

その成果は同2011年10月29・30両日の悠久祭（学園祭）、11月13日に本学を会場に行われた学生・生徒交流茶会（学校茶道連絡協議会主催）、11月23日に「まちなかキャンパス長岡」で行われた茶会（大学の広報活動）でも披露された。セミナーに参加した学生たちの技術・意識が向上したことは勿論だが、参加しなかった後輩たちも、自分のめざすハードルを上げて稽古に励みだしたのは喜ばしいことであった。そして、2012年7月12～15日には2名の学生が、2013年3月14～17日には4名の学生が京都の裏千家学生セミナーに参加した。夏のセミナーは風炉

の点前、冬は炉の点前で、内容は異なる。残念なことに、年度末の3月はヒューマン・パワーアップ・プロジェクトの適応にならないので、学生は全額自費で参加した。それでも、夏・冬両セミナーに参加したいのが、学生の偽らざる気持ちであった。

顧問交替

このような経緯で2012年に至ったのであるが、私が茶道部の顧問を引き継いだ2007年から2009年までのことについても少し触れておきたい。

私が、退職なさった前任者（定方昭夫教授）から引き継いだ2007年は、長岡短期大学から改組転換して長岡大学になって6年目の新学期であった。そのとき、部員は女子学生1名で、その学生・吉田真実が部長でもあった。吉田の話によれば、吉田は3年先輩の中国人女子留学生・周麗芳部員から「日本人のくせに茶道部をこのままにしているのか」と言われ、入部したのだという。周は横浜市立大学の大学院に進学し、下級生の吉田が残った。吉田はしばらく、茶道講師（中沢文枝・茶名 宗文）を独占し、学友会からの部費を一人で遣い、茶道の稽古に励んでいた。吉田は2年生のとき私のゼミ生で、レポートはいつも茶道に関するものであった。

私が茶道部の顧問になったとき、吉田は3年生になった。まもなく、吉田と同期生の中国人女子留学生・成智美が入部し、副部長になった。成智美も2年次は私のゼミ生であった。この2人は大変仲がよく、学内外で行動をともにすることが多かった。成はユニオン・ツール（精密機械のネジを造る会社、本社は東京）の長岡工場で通訳のアルバイトをし、長岡市民センターで市民に中国語を教える活動もしていた。学業の成績も良かったが、まだ、能力が十分に引き出された状態ではなかった。

2008年になり、新入生が男女1名ずつ入部してきた。吉田は部員が増えたことによって、部員の面倒を見るという仕事が増えた。以前は自分の稽古にだけ専念すればよかったが、部員のことでも考えなければならなくなったのは大変だと漏らしたこともあった。

和室の使用をめぐる

当時は和室の使用をめぐる問題も起こった。別のクラブが和室で活動するようになり、和室を茶道部のみで使えなくなったのである。

長岡大学に一室だけあるこの和室は、長岡短大時代、当時の中山信一理事長が茶道部のために床の間と水屋のある和室を造らせたものであった。茶道具も中山理事長の時代に買ったものが主である（昭和63年4月28日に江口宗鈴先生から纏まった茶道具が寄贈された目録が残っているから、裏千家茶道の稽古が始まったのはこの頃からかと推測される）。和室はきれいに使われていたが、2004（平成16）年10月23日の中越地震のおり、避難所として和室に宿泊を許可したことがあった。中越地震が起こったのは中西貞夫学長から原陽一郎学長に替わった年のことで、理事長も品川英夫理事長に替わっていた。

学長に掛け合おうと思ったものの、当時の学内状況では茶道部の要望を受け入れてもらうことは難しく、学内の教職員の中にも、和室は大学の施設であるから茶道部だけが使うものではないという意見が結構多かったので、しばらく様子を見ることにした。

茶道部の選択した道

吉田の茶道への情熱は失せず、京都宗家の学生セミナーに行くことをめざし、中沢先生の師匠である赤沼富美（宗美）先生の稽古場にも通って指導を受けることになった（学年暦の都合で、京都行きは実現せずに卒業となったが）。

成には「鑑真記念：逆渡航・日中青年交流計画」へ応募することを勧めた。これは早稲田大学の木下俊彦客員教授が主催する勉強会「中国塾」が企画したもので、日中平和友好条約締結30周年にあたる2008年に、鑑真の渡航軌跡を日本から逆に辿って中国に渡り、両国の若者が交流するというプロジェクトであった。成は、「日中関係改善に向けて私がしたいこと」というテーマの作文を提出し、面接を受けて、全国から選ばれた中国人留学生を含む31名の大学生の1名となった。その後、奈良で一泊二日の研修に参加し、9月9日から17日まで、船で中国まで行って来た。そして、2008年10月26日の悠久祭において、茶道部は茶室を一時閉め、217教室で「長岡大学茶道部 成智美 参加報告会－鑑真記念：逆渡航・日中青年交流計画奈良一泊研修と訪中」を行った。成に中国語を習っている長岡市民やユニオン・ツールの上司も来てくださり、最後は、成が中国語に翻訳して中国でも合唱したという「今日の日はさようなら」を合唱して閉会となった。

成のことは、長岡あれこれ情報誌「マイ・スキップ」(2009年2月、vol.97)でも取り上げてくださり、また、このプロジェクトは一冊の本『重返鑑真路：2008年鑑真記念・逆渡航日中青年交流活動』(折敷瀬興・小野豊和編 北京：社会科学文献出版社 2009年10月発行)になって日本と中国で販売され、それに各参加メンバーの参加記が載せられたのである(本学図書館所蔵)。成は卒業論文「サブプライム問題と世界恐慌」も奨励賞を受賞した。成は、ユニオン・ツールに望まれて就職試験を受け、正社員となった。吉田は長岡のJAに就職した。2人は卒業後も中沢先生に茶道の指導をしていただくため、先生のご自宅に通うことになった。

中継の部長

個性の強い2人の先輩の後に部長になったのは2年生になった佐藤咲子であった。佐藤は、「本当に私でいいのですか。でも、私しかいないですよね」と、不安と覚悟を見せていた。もう一人の男子部員は時々しか稽古に来ず、しかも実力に差がついたことを恥じてか、一緒に稽古することを避けていたので、部長は無理であった。佐藤はあまり器用ではないが、ひたむきな学生であった。この年の新入生歓迎会の花見(学友会主催)は天候に恵まれず、会場が体育館になった。佐藤は体育館の一隅にビニール・シートを敷いて、お茶を点てて振る舞った。時々バスケットボールが飛んでくる中で、ひたすら茶を点てていた。稽古ではいつも脚がしびれていたため、「咲子ちゃん、脚、大丈夫？」と声をかけると、「わかりません。感覚がありません。」と答えた。佐藤の努力はむくわれ、この年、部員が増えた。

佐藤が3年生になってしばらくたった頃、就職活動期に入ったら部長と学業とを両立させることは無理ではないかと判断し、部長を譲って、前部長として全体を見ていってはどうかと持ちかけると、佐藤は承諾した。次の部長に誰が適任か聞くと、斎藤美如の名を挙げた。私も中沢先生もそれに異存はなく、後期から、2年生の斎藤が部長になった。

茶道部の内紛

斎藤は自分にも他人にも厳しい学生であった。稽古も会計も、きちんとしなければ納得しなかった。斎藤が3年生になった2011年、ヒューマン・パワー・アップに茶道部としては初めて応募、合格し、斎藤を含む3名が京都宗家の学生セミナーに参加した。これがセミナー参加の初回であることは前述のとおりである。応募の書類作成、プレゼンテーション、報告書作成、報告のプレゼンテーションにいたるまで、斎藤の力によるところが大きい。

しかし、このころ、茶道部には新たな問題がくすぶっていた。茶道に真剣に取り組む学生と、たかがクラブ活動と考えている学生との間に溝ができてしまった。公費を受けて京都まで

行って勉強してきたのに、という批判が起こった。こうした内紛状況にたいし、前部長の佐藤は、「私はどれだけ介入すべきだろうか」と悩む。この内紛は学内の一部にも知られるところとなったが、結局、斎藤の言うことが正論で、斎藤が残り、反対派は去って行った。佐藤は卒業し、三条市で介護職に就いた。

茶道の稽古は、教えられるままに受け入れることができる学生でなければ続かない。受け入れて、その上で自分のものにしていくのである。いちいち反発する学生には向かない。

「たかがクラブ活動」、しばらくやってみて、合わなければ、他のクラブに行けばよいと、私は思っている。

斎藤の見事なところは、この内紛について部内では一言も語っていない点であった。ますます稽古に精進し、後輩の指導をした。4年生になっても、部長は3年生の住谷瞳に譲ったものの、稽古には出つづけ、就職は食品開発関係の仕事、という希望通り、「まるこう食品」に就職した。斎藤が4年生のとき、茶道の講師が今井憲子(宗憲)先生に替わった。斎藤は卒業後も続けたいと今井先生に相談し、新発田で先生を紹介していただくことになった。

住谷は高校生のときから裏千家茶道を学んできた実力者で、斎藤と一緒に京都のセミナーにも参加した。斎藤も住谷も本冊子に執筆しているので、私はここまでにしておこう。

本冊子は、学生のクラブ活動の記録であるが、私にとっては、教育の記録でもある。
(肩書きは当時のものとしました。)

◎ 朝日茶会

2012年5月13日、何とか天候にも恵まれた新緑の日曜日、第10回朝日茶会が行われました。このお茶会は、朝日酒造株式会社主催で毎年恒例の茶会です。今年で10回目を迎えました。

お茶席は朝日酒造の館内エントランスホール、松籟閣、もみじ園の3会場でした。また、それに加えて朝日酒造館内の2階食堂で、点心のお弁当が食べられました。総じてそれぞれのお席ごとでそれぞれ違った雰囲気味わえ、とても楽しかったです。

エントランスホールは、裏千家の薄茶席でした。吹き抜けの天井に、机と椅子の立礼、ガラスの蓋置や茶碗、床などが、和室とは違った少し近代的なものとの組み合わせのある不思議な空間で、入りやすいお席でした。

松籟閣は、宗徧流の濃茶席でした。こちらは和室で落ち着きのあるお席でした。人数が多くて、私たちのいた場所からはお点前やお道具などが見えず残念でしたが、お席は堪能することができました。お濃茶も、飲み方など、少し心配なこともありましたが、いただくことができました。

もみじ園は、石州流野村派の薄茶席でした。この会場は、他の2つの会場とは異なり少し離れた場所にあり、バスで移動しました。青々としたもみじが綺麗な庭があり、こちらもお席は趣のある和室。待合に菖蒲の花が活けてあったのも印象的でした。

朝日酒造館内の2階食堂でいただいた点心のお弁当もおいしかったです。デザートにアイスクリームも付いていました。朝日山オリジナルの酒粕アイスクリームです。小豆のさっぱりとした甘さがおしかったです。

当時大学2年生だった私は、この時が初めての朝日茶会参加でした。初めての参加ということや、大人の方々に混じっての参加だったこともあり、ワクワクしながらも緊張していました。着物の方もたくさんいました。どんな服装で行けば良いのかわからなくて、色々悩んだ記憶があります。まだその時は、今ほど着物の着付けにも慣れておらず、なるべくお茶席に添うような落ち着いた洋服で行きました。

このお茶会は、大きなお茶会で、1席に多くの相席の方がいられる大寄せの席でした。当り前のことではあるのですが、普段の稽古の時のように知り合いや先生や先輩だけではなく、大人の方々と混ざって相席します。その雰囲気が、普段の部活とは違って新鮮な気持ちを感じさせられました。

それと併せて、実は、最初は少し緊張もしていました。客として参加するので、そこまで硬くならずとも気を楽しんで楽しめれば良いのだとは思いますが、いかんせん私は小さな所がありまして、やはりいつもと違うことをするとなると少し緊張してしまうのです。はじめての参加ということもあったのかもしれませんが、また、相客の方やもてなしてくださる方への配慮は大事にしようと、意識しすぎてしまっていたのかもしれませんが。お道具や茶道のことなどもまだまだ全然わかりませんので、できるだけ正客と末客の間に入るようにして、説明やお話を聞かせていただきました。そして、お茶会が進むにつれ、不思議なことに少しずつ気持ちが和らいでいきました。おいしいお茶とお菓子、席主や正客のお話、初めて見るお道具やその説明、おもてなし、相客同士での心配り、空間、雰囲気、色々なものが時間とともに和み、楽しむことができるようになりました。いつのまにか緊張感から満足感へと変わっていきました。

さらに、もう一つ感じたことは、相客の方や、お運びなど席を待っている方との交流が心に残ったことです。きっちりとお話しするわけではなくても、お菓子やお茶を頂くときに「お先に」と声をかけたり、お道具などの説明をしていただいたり、その合間のあいさつやちょっとした

ところに、心のふれあいや日本人の気遣い、思いやりが表れているのかなと実感させられました。

わからないながらも、はじめて知るお道具、お客様のために考えられた組み合わせなどの趣向、おもてなしが工夫されていて、素敵なお茶会でした。部活とはまた違った形で、このような茶会を味わうことができよかったです。

○ まちなかキャンパスの茶会

〈茶会の概要〉

2012年6月9日（土曜日）、まちなかキャンパスで長岡大学の広報活動の一環として、茶会を開催した。この茶会は昨年の11月にも開催して好評をいただき、その結果依頼されたもので、2回目の開催となる。

今回は湯釜ではなく、銀瓶ぎんびんにお湯を沸かして、お茶を点てる点前を行った。点前機の近くに野点傘の だてかさを置き、短冊うたはなづつをかけ、歌花筒うたはなづつに花を生けた。

部員や茶道の今井先生の知り合いの方、前から親交がある長岡技術科学大学茶道部の学生、まちなかキャンパスで講座を受けていた方などがお越しくださった。

〈感想〉

フローリングでの立礼りゅうれいの茶会は、正座をしなくてもお茶が飲めるという点で、気軽にお菓子とお茶をお客様におもてなしできて良いものだと感じた。

今回の茶会で、茶道の茶会は畳の上でお菓子とお茶をいただくものだけではなくて、気軽に椅子に座ってもいただけるものだと知るきっかけになってくれると嬉しいと思った。

私は、もしかしたらまちなかキャンパスで講座を受けている方たちにとって茶道は敷居が高く、あまり来ないのではないかと思った。しかし、思ったよりも来てくださって嬉しかった。

今回の茶会は赤い野点傘を立てた。野点傘を立てることによって、人に注目してもらえるし、フローリングの会場を和の雰囲気に変えることができた。

半東をした時に私が大きな声で説明していなかったので、奥のお客様の耳に届かず、聞こえにくかったと指摘された。この時、お茶会をする空間の大きさによって声の大きさを変えていかなければならないと感じた。

学外で茶会を開催できたことは貴重な体験だったし、私たちの精進ぶりを学外の人に見てもらうことができ良かった。

〈課題〉

- 1 常に席中の様子を見る
- 2 お客様の気持ちが第一
- 3 無口にならない

- 1 常に席中の様子を見る

今回の茶会は、畳の個室でするのではなく、広い空間で大人数を呼び込んで行ったので、何人が席に入ったのかや、お茶碗を下げるタイミングなどを見計ることが難しかった。常に席中の様子をうかがって、亭主ていしゅや半東はんとう、お客様の細かい動きなどに気づいて行動できる

ようになりたい。

2 お客様の気持ちが第一

私はお茶会があるたびに、お点前を間違えないようにしようと考えながらお点前をしていた。その時は、お点前のことしか頭になかった。しかし、茶会は点前だけではない。お菓子やお茶でお客様をおもてなしして、「この茶会に来てよかった」、「またこのような機会があったら行きたい」と思えるような茶会を行うことが、何よりも大切だと思った。

3 無口にならない

茶会では、会話も大切である。私が半東になりお客様とお話をするようになった時、緊張して何を話せばいいのか分からなくなってしまい、無口になってしまった。なぜ緊張してしまったかという、私は元々人前で話すことが苦手だからである。しかし、苦手なことから逃げていたらいつまでたっても克服できない。今後、苦手なことをやる機会があったら、それは克服できるチャンスだと思って挑戦したい。

○ 納涼茶会

2012年7月25日（水曜日）、長岡大学にて納涼茶会が行われました。例年は7月上旬の七夕の時期に七夕茶会を行っていましたが、この年は茶道部のメンバーのうち何人が裏千家セミナーに参加し人数が揃わなかったため、7月下旬に納涼の茶会として企画されました。

会場は大学内にある和室でした。前年の七夕茶会では、学生たちがお昼を食べたり休憩に使ったりする学生ホールを借りていたのですが、この年は茶道部が活動している和室を使用しました。

先生方や事務職員、学生や外部からのお客様もたくさん来ていただきました。

いつもの稽古や悠久祭の茶会などでも使っていた和室でしたが、七夕ではなく納涼の茶会という、去年とは少し違う趣の茶会だったため、私は少し緊張していたように思います。

当時の茶会からどのようなことを学んだのか振り返って、2つのことをお話ししたいと思います。

まず1つ目は、裏方など、表以外の役割の大切さです。茶会までの準備や、当日の水屋、受付など、裏方で支える役割がすごく重要になることを、改めて感じました。

当日の茶会の水屋では、裏でお茶を点でて出すタイミングを計ったり、お茶やお菓子が行き届いているか、何かあったらすぐ裏で対応できるように、音などをたよりに席の様子に気を配ったりする、とても難しい役割だと感じました。同時に、とても重要な役割だということも痛感しました。

また、事前準備もしなければ茶会ができません。今回の茶会では、事務の方から頂いた笹を廊下に飾りました。七夕のようにお願い事を書く短冊を用意し、折り紙の飾りなどもたくさん作りました。茶券は、すいか型のものを作りました。部員の仲間がデザインを考えてくれ、それをみんなでひたすら切ったり貼ったりして作ったものです。みんなで空いている時間を見つけて準備していたことを思い出します。ポスター作りや、飾り作り、茶券作りと販売など、今回は装飾もあって大変でした。

茶会の趣向を考えることもそうですが、それ以外のところでも色々な準備が必要で、茶会を開くことは大変だと改めて感じました。分担したり、先生方の協力を頂いたりしました。小さ

なお茶会を開くにも、多くの人の協力や時間、道具など、たくさんの準備が必要だということ、また、そのために協力や計画を早め早めにしていくことなどの重要さも学びました。

2つ目に感じたことは、見方を変えたり、相手のことを考えて物事を試行錯誤したりしていくことの大切さです。

茶室の床に掛ける軸を決める時に、そのようなことをふと思いました。七夕の色紙を使おうということだったのですが、軸の色をどうするかという話題になったのです。選択肢は元から部室に掛けてあったベージュのものと、別の紺色のものでした。壁が軸に近いベージュのような色だったためか、紺に変えただけで大分床の雰囲気引き締まった感じがしました。色のバランスの大切さ、少し目線を変えて変化させただけでも、何かとても新鮮な気持ちになりました。

自分の知らない物事にふれて視野を広めたり、どういう風にすれば、より良く、また、改善していけるかを試行錯誤していったりすることは、大切なことだと、改めて気付きました。

まだまだ勉強不足で、知らないこともたくさんあり、その度ごとに発見があります。今それぞれを振り返ってみると、改めてどう思っていたのか感じたり、新たに発見したりできて、良かったです。

今後も、茶道から学んだことを、人間的な成長や地域との関わりに生かして行けるよう頑張っていきたいと思います。

◎ 杜々の森名水茶会

2012年8月5日(日)、長岡市西中野俣にある杜々の森名水公園で杜々の森名水茶会が行われた。この茶会は、「杜々の森湧水」という全国名水百選に選ばれた湧水で茶を点てる場所に特徴がある。毎年8月の第一日曜日に茶会を開催している。私たち長岡大学茶道部員3人は、午前中はお手伝いとして、午後は客として参加した。

杜々の森名水公園は山奥にあり、自然豊かなところだった。午前中は受付で赤飯とペットボトルのお茶を渡す役目をした。着物で来た人もたくさんいた。真夏で屋外の作業だったので暑かったが、笑顔でお客さんと接するように心がけた。一度は屋外でお茶会を開催したいと思っているが、気温や天候を考えたり気を配ったりすることが多く、大変だということ学んだ。

私たちの他にも、高校生が杜々の森名水茶会のお手伝いをしていた。その中で、男子高校生たちが一生懸命お茶会に使用する湧水を運んでいたが、大変そうだった。杜々の森のような湧水があると、普通の水で点てるよりもおいしく点てることができるので、自分たちでお茶会を開催するときに湧水をつかうのも一つの手だなと思った。

午後からは客としてお茶席をまわった。この茶会は、宗徧流那須社中と裏千家淡翠会、中野俣小学校生徒の3席があり、最初に中野俣小学校生徒のお茶席に参加した。中野俣小学校の席は野点で行われた。中野俣小学校では、総合学習の一貫として茶道を学んでいて、例年この茶会で一席を担当するそうだ。小さい子供達がお茶を点ている姿はとてかわいかった。小学生でもきちんと着物を着ていて、本格的なお茶席になっていた。自分も幼い頃にこういう経験ができたらよかったと思った。半東も小学生が担当していて、積極的に、席にお越しになったお客様に話しかけていて感心した。私は半東が苦手である。緊張するし、道具の説明だけで、なかなか話を広げられない。しかし小学生は、「どちらからお越しになりましたか？」など、茶道とは関係ないことも聞いていたので、道具の説明だけではなく、日常的な会話をしたほうが

お客様も緊張が和らいで良いのではないかと思った。中野俣小学校の生徒が、お茶会を行ったことをきっかけに、これからも茶道に興味を持ってくれるといいなと思った。

次に、「アトレとど」で裏千家淡翠会のお茶席に参加した。この席は、御園棚で点前をしていた。会場が室内だったので、涼しかった。花は杜々の森名水公園の近隣に生えている野の花を生けていた。自然が豊かなところでは、花も用意しやすいことを学んだ。

最後に、「望岳庵」で宗徧流那須社中のお茶席に参加した。会場は室内だったが戸が開いていたので、たびたび虫が入ってきた。私は虫が苦手なので怖かったが、亭主も半東も平然と点前をし、お客様にお話をしていました。自然豊かなところでは、虫の心配もしなければならぬと気付いた。

今回のお茶会を通して、屋外でのお茶会での長所と短所、また、半東の時はお茶会で使用している道具のことや茶道のこと以外のことも話してよいことを学んだ。これらのことに気をつけながら、茶道の活動を続けたいと思う。

○ 長岡市民茶会

2012年9月30日(日)に開催された第三十四回長岡市民茶会に、当時の茶道部2～4年生は、第四席の裏千家淡交会中越支部の社中の方々と一緒に、水屋の手伝いとして参加した。

この茶会は、長岡市の後援により長岡市民茶会実行委員会の主催で開催された茶会であり、裏千家のほかにも、宗徧流、表千家、石州流野村派、小川流煎茶の五つの流派の茶会を、アトリウム長岡、ホテルニューオータニ長岡、互尊社という三か所の会場に分かれて行うという大規模なものであった。

学外で茶会を行う経験が少ない私たちにとって、何百人規模の一般のお客様相手の茶会に参加することは当然初めての経験であったため、参加する前から不安や緊張でいっぱいだった。

当日は、主に茶席の運びを他の社中の方々と一緒に担当させて頂いた。今回の市民茶会に参加することが決まってから、夏季休業中に何度か運びの稽古をつけて頂いてはいたものの、私自身はなかなか稽古のようにはいかず、課題が多く残ったというように感じた。

席が始まり、菓子器を運ぶところから課題は多く、正客に運ぶ菓子器以外は、席に入られたお客様数によって変動するため、自分の前に菓子器を運ぶ人のお菓子の量をしっかり把握しつつ席に入り、即座におおよその人数を数え、前の人を運ぶ人数分の間を空けて自分の菓子器を置かなければならない。この即座にお客様の数を把握しながら運ぶ、ということが案外難しく、お客様を凝視して人数を数えていると自分の足元がおぼつかなくなってしまうし、人数を数え間違えてお菓子が回ってきていないお客様を出してしまうこともあった。また、お茶を運ぶ時も、間を空けず次々に運びが席に入らなければならないのだが、タイミングがうまくつかめず、席の入り口で茶碗を持ったまま立ちすくんで、列を作ってしまうことや、早く出過ぎて席の中でうろろろしてしまうこともあった。さらに、大寄せの茶会の場合、お茶を運ぶだけではなく、運んだあと、さっと周りを見てお茶碗が空いていたら臨機応変にお茶碗を下げ、お詰めのお客様までお茶が回ったかどうか確認しなければならないのだが、最初の席ではみんな運ぶことばかりに集中してしまい、後半で空いたお茶碗が大量に残った状態になってしまった。

そして、席が終わった後も気が抜けず、すぐに席を清めなければならないのだが、何をしたらいいのかよく分からず、先生方に「これをしなさい」と言われて初めて動くというような状

態だった。

今回の水屋の手伝いは午前中だけの参加ということだったので、ほんの数時間ではあったが、あまりにも思ったように動けず、私自身は反省の思いでいっぱいだった。しかし、茶会では本来こう動かなければならないということを、実地で体験できたように思う。単に運びと言っても、常に周りを気かけ、視界を広く持つこと、場を乱さないように臨機応変に動くこと、席を清めるなど短時間で行うことはできる限り素早くモレのないように行い、時間通りに席が始まるようにしなければならないことなど、挙げればきりがなくらい多くのことを学ばせて頂けたように思う。茶会での動きは茶会でしか経験できないが、普段の稽古でももっと自分で考えて行動することを心がけていきたいと思うようになった。

この市民茶会を経験させて頂けたことで、茶会に対する意識が本当に変わったように感じるし、部員たちも少しずつ動きが変わったように思う。

また、この時は全く手つかずの状態だった水屋の動きや茶会の準備の様子も、茶会を経験させて頂くごとに少しずつ良くなっているように感じる。

今井先生は、茶会の準備から最後の片付け、道具の手入れまで完全にできるようになって初めて「お茶をやってきました」という風に言える、とおっしゃっていたことがあった。私たちはまだまだ、自分たちで一から十まで茶会を完遂することができないが、その状態に少しでも近づけるようになっていきたいと思うし、ここ数年の茶道部の活動を見ていると、いつかできるようになるのではという思いが湧いてくる。私が茶道部に入った頃と比べて、格段に技術も意識も向上した今の茶道部の、これからの成長に期待していきたいし、自分もあと少しになった在籍期間のうちに少しでも成長していきたいと思う。

◎ 裏千家淡交会青年部 第45回北陸信越ブロック会員大会

2012年10月6日・7日(土・日)に長岡市で開催された、裏千家淡交会青年部第45回北陸信越ブロック会員大会への招待を頂き、茶道部部員4名が参加した。

1 裏千家淡交会青年部

裏千家淡交会青年部とは、50歳以下の裏千家茶道愛好者を会員とする青年文化団体である。会員は、「修練・奉仕・友情」を3つの活動の柱として、時代の変化や社会のニーズに柔軟かつ的確に対応しながら、茶道と茶道精神を通じた楽しく有意義な活動を展開している。

昭和25年、お茶の先生の集まりである淡交会の中に最初の「青年会」が設置され、以来すでに60有余年の歩みを続けている¹。

2 第45回北陸信越ブロック会員大会概要

- ・大会テーマ：「米づくし・米百俵・中越まるごと食べつくす！」
- ・主催：社団法人茶道裏千家淡交会青年部北陸信越ブロック
- ・主観：社団法人茶道裏千家淡交会中越支部中越青年部
- ・開催場所：アオーレ長岡・長岡グランドホテル、他
- ・日程：平成24年10月6日、7日

1 裏千家淡交会青年部HPより抜粋

・参加者数：242名

・大会日程

10月6日(土)

9:30～12:30	受付	長岡グランドホテル1階ロビー
10:00～15:30	濃茶席(ブロックOB席)	長岡グランドホテル3階和室『羽衣』
	薄茶席(おもてなし席)	アオーレ長岡1階ホワイエ
11:00～17:00	食体験	長岡グランドホテル2階広間『悠久』
	米百俵まつり散策	アオーレ長岡ナカドマ他、駅前通り各所
15:00～	ホテルチェックイン	
17:30～18:30	開会式	アオーレ長岡1階市民交流ルームA
19:00～21:00	懇談会	長岡グランドホテル2階広間『悠久』

10月7日(日)

6:30～	朝食・チェックアウト	
8:45～11:00	呈茶席(中越青年部)	長岡グランドホテル3階和室『羽衣』
	体験席(見学)	アオーレ長岡3Dシアター他、長岡震災アーカイブセンター
11:10～12:00	総本部報告	アオーレ長岡1階市民交流ホールA
	全国委員正副助言	
12:00～12:30	閉会式	アオーレ長岡1階市民交流ホールA

2-1 会員大会1日目

会員大会1日目、まず参加させて頂いたのが、ブロックOBの先生方による濃茶席である。ここでは先生方からのおもてなしを頂いた。

その後、アオーレ長岡に移動し薄茶席(おもてなし席)に参加した。この薄茶席では会員大会参加者がもてなす立場となり、長岡市民の皆様へ一服を差し上げた。私たちはお運びをお手伝いさせて頂いた。最初は緊張でかたくなってしまうていたが、多くの方に「おいしかった」「楽しかった」と声をかけて頂き、笑顔で楽しむことができた。当日は米百俵祭の開催中ということもあり、1000人以上の市民の方に来場して頂いた。

夜の懇親会では多くの会員の皆さんと交流することができた。

2-2 会員大会2日目

会員大会2日目には中越支部の先生方から薄茶席で薄茶を一服頂戴し、長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」と3Dシアター(長岡花火)を見学した。

きおくみらいでは、担当の方より中越地震の発生時から復興のお話を伺い、改めて人と人とのつながりの大切さ、素晴らしさを実感した。

3 会員大会に参加して

まず感じたのは規模の大きさである。これまでも交流茶会や学生セミナーなどへの参加を通じて、たくさんの方と交流させて頂いていたが、今回200名以上が参加するブロック大会に参加させて頂き、あらためて全国各地に多くの仲間がいるのだと感じることができた。参加者はすべて裏千家茶道の関係者であり、私たちの大先輩にあたる。当初は緊張す

るばかりで表情も硬くなってしまったが、たくさんの温かい言葉を頂き、最後は笑顔で過ごすことができた。

また、今回の大会では長岡の魅力を再確認することができた。大会のテーマである「米づくし・米百俵・中越まるごと食べつくす」にふさわしく、長岡の歴史、文化、食を満喫する2日間であった。2日目のきおくみらい見学後、県外からの参加者から「地震後の様子にはショックを受けたけど、それを乗り越えたからこそ今の長岡がある。今回参加して長岡のあたたかさ、強さを感じた。長岡って良いとこだね」と仰って頂き、長岡の学生としてとてもうれしく感じた。

○ 悠久茶寮

平成24年度(2012年)の悠久祭(大学祭)では、1号館3階の和室で10月27日(土)と28日(日)の2日間に渡り茶会を開いた。席名を悠久茶寮とし、来場者からお茶と菓子の料金を戴いて催した席であった。私個人としては、初めて本格的に参加した茶道部の行事であり、失敗から学ぶことの多かった茶会である。本稿では、私が2年生の夏から茶道部に途中入部した経験も交えて、悠久祭についての感想を述べたい。

悠久祭では待合を311教室前に設置し、席入りを待つ客を香煎(漢方、塩に湯を注いだもの)でもてなした。香煎は分量の調節が難しく、丁度いい塩味を出すための試作を何度も繰り返した。香煎は来客に爽快感を感じてもらうために青ジソの入ったものを使った。周りには野点傘を立て、そこに短冊と季節の花を飾った。今までの活動内容を展示した掲示板も設置した。

本席は1号館3階の和室で行った。15畳の和室を水屋屏風やスクリーンで区切り、8畳の茶席と水屋をしつらえた。床の間に芳賀幸四郎(東京教育大学名誉教授)筆「秋空一聲雁」の掛軸をかけ、本学の背後にたたく蒼柴の森を主題に席を構成した(茶道では掛軸を第一の道具とし、それを中心に他の道具との取り合わせを考える)。花入れは四方の籠を使い、香合(香を入れる容器)には梘の置物を用いた。

点前(茶を点てること)では桑小卓(クワコジョク)という小棚を使った。この棚は裏千家4代臘月庵仙叟の好みで、矢立を見立てたものである。裏千家発祥であるが表千家でも使い、道具の飾り方が異なる。この棚での点前は複雑で、入部して数ヶ月の私には歯が立たなかった。2日間を通じて2回ほど点前をする機会を頂いたが、両方とも間違いばかりで情けない限りだった。

この茶会に臨むにあたって、私が茶会記(茶会の記録)を作成する係になった。正式な会記は奉書紙に筆で書くのだが、時間と力量の関係でパソコンの文章を印刷したものになった。会記には茶道の流派ごとに形式の違いがあり、不慣れな私を作った会記は指導者の今井先生に何度も校正して頂く破目になった。

作り直す作業は大変だったが、会記の作成を通じて茶会に使う道具に詳しくなることができた。桑小卓の由来、薄茶器の模様や技法、萩茶碗の特性など、道具に関することの数多くを先生に教えて頂いた。この経験を通じて茶道具への興味を持つことができ、少しずつ名前を覚えたり良さがわかったりするようになった。これ以降も何回か会記を作る機会があったが、その度に新しい知識を得て成長することができた。次回は筆で書く正式なものに挑戦したい。

今回の茶会で私が一番苦戦したのは半東の役割である。半東とは亭主の補佐役で、来客への挨拶からお茶の運び、道具の説明までを行う。点前をするよりも難しいとされていて、通常は

茶道に十分精通したものが務める。しかし、悠久祭では人数不足のために入部して間もない私も4回ほど半東をしなければならなかった。

茶席はいつも予定どおりに進行するとは限らない。席の途中で客が入退席することはしょっちゅうで、最初の席では水屋屏風が倒れる事件もあった。このように起こる様々な事態へ対応することも半東の仕事である。また、客から道具の事を尋ねられれば適切な回答をしなければならない。茶会を開く以上は自分たちの道具について知らぬ存ぜぬでは許されないのである。

立派なことを書いたが、私の半東は未熟極まりないものだった。まず、客への挨拶の言葉が出てこない。いざ人前に出てみると何を話していいのかわからなくなってしまった。次に、道具の説明や客との会話が上手くいかなかった。当日は本席の花が5種類生けてあり、花の調達から生けるまでを今井先生にたよりっきりにしていたため、花の名前を最後まで覚えることができなかった。当然客の問いに対して答えることができず、せっかく尋ねて頂いたのに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

失敗ばかりが思い出される悠久祭であったが、この茶会を機会に、私の茶道に対する心構えが大きく変わった。途中入部ではどうにもならないと思っていたことを改め、茶道に対して真剣に向き合うようになった。茶道に限らず、何事も学ぶのに遅すぎるということは無いのではないだろうか。この悠久祭は、私に課題と目標を示してくれた大切な思い出である。

○ 学生・生徒交流茶会

平成24年度(2012年)の学生・生徒交流茶会は、11月11日にホテルニューオータニ長岡の瓢々亭で開催された。この茶会は、中越地区の裏千家学校茶道の指導者たちが学生や生徒の交流や技能の向上を目的として催す茶会で、平成24年度は本学が担当校であった。わたくしは実力不足のため、点前(お茶を点てること)では補欠だったが、自分なりに感じたことを記したい。

瓢々亭は、ホテルニューオータニ長岡の屋上にある茶室で茶庭もある。私は茶庭を見た事がなかったので、路地の構造や蹲(手や口を清めるもの)の使い方が勉強になった。当日はきれいに清められていたが、実は前日の掃除が大変だったそうだ。先生方に掃除を任せてしまい申し訳ないと思った。茶道では庭の掃除も大切な勉強であるので、次の機会には必ず手伝うようにしたい。

瓢々亭は京間の茶室である。畳の規格には京間、江戸間、マンション間等があるが、京間は、関東で主に使われている江戸間よりも大きな畳である。裏千家茶道では半畳を2歩で歩くことになっているが、普段江戸間で練習している私にとって京間の2歩はすごく大股に感じた。着物で歩きづらい女子部員にはもっと大きく感じられたのではないかと思う。京間は広いと常々言われていたが、その広さを体感できる貴重な体験だった。

点前では秋泉棚を使い、飾りは総飾りにした。総飾りとは、拝見に出す道具を全て棚の上に置く飾り方で、秋泉棚の特徴は帛紗(水に濡らさない道具を清める布)も飾ることである。補欠の私は点前をしなかったが、帛紗を飾り忘れた席が何席かあった。帛紗を飾ると棚全体が引き締まって見えるが、飾り忘れた棚は何だか間が抜けたように感じた。小さいことではあるが、その小さいことが見た目に大きな印象を与えることを学んだ。

当日生けた花の葉には虫食いがあった。黄葉で黄色くなった大きな葉に小さな虫食いがあり、穴から向こう側が見えた。私は虫の食べた葉を使ってはいけないと思っていたが、虫食いこそ

が自然であり、そのありのままを生けるのが茶の花だと教わった。花は茶室の中で唯一の命である。時間の経過とともに花の蕾が開いていくのも面白い。利休が言う「花は野に咲くように」という理念を少し理解できた気がした。

炉(一尺四寸四方の囲炉裏)では本物の炭を使った。普段は電熱で釜の湯を沸かしているのに、実際に炭を使ったのは初めてだった。やはり本物の炭は電熱とは火力が違い、釜の蓋を開けると白い湯気が勢いよく上がった。炭で沸かした釜の湯は口当たりが柔らかく、いつもより温度が高くても飲みやすく感じた。途中で炭から火の粉が飛んだが、前準備として炭を水洗いしないと火の粉が出ると教わった。真っ赤に燃える炭は美しく、自分もいつかは炭を操れるようになりたいと思った。

当日は天気がよく、庭の紅葉したもみじが青空に映えた。常日頃から、茶道には季節感を持たせなさいと言われていたが、季節の彩りをこんなにも鮮やかに感じた茶会は初めてだった。真っ赤なもみじ、黄色い葉、火ざかりの炭の美しさが私の心に残っている。

◎ 平成24年度 第50回学生茶会

2012年11月18日(日)に新潟市で行われた平成二十四年度第五十回学生茶会に、私たち長岡大学茶道部の5人は客として参加した。茶会は砂丘館、旧齋藤家別邸、北方文化博物館新潟分館の3カ所に分けて行われていた。

最初に、砂丘館で長岡技術科学大学のお茶席に入った。技科大の流派は石州流である。同じ長岡市ということもあって、交流のある大学である。道具を長岡から車で運んできたと言っていた。花なども全部自分たちで準備したのだという。今回の学生茶会の主催者側で長岡から参加している学校は技科大だけだったので、遠いのにわざわざ運んできていてすごいと思った。

砂丘館に入るのは初めてだった。昭和8年にできた、とても趣のある建物だった。

次に、旧齋藤家別邸で国際情報大学茶道部のお茶席に参加した。流派は表千家である。お茶席に入る前に、待合室に通された。そこには、不要になった袋を切って作ったアート作品があった。11月なので、芸術の秋でいいなと思った。作品を眺めているとあっという間に時間が過ぎてしまうので、ただ待っているよりもお客さんを退屈させないのでいいアイデアだと感じた。お茶席は待合室から離れたところにあり、一度外に出て歩かなければならなかった。ちょうど紅葉の季節だったので、もみじがきれいだった。池もあって、和の雰囲気がよくでている場所だった。

表千家はあまりお茶を泡立てない流派である。逆に裏千家はお茶を泡立てる流派なので、あまり泡立っていないお茶が出てきて少し見慣れない感じがした。会記も自分たちでつくっていた。この頃は、長岡大学ではまだ会記をつくるという作業を私は行っていなかったので、とても印象に残った。ただ残念だったのは、半東が道具の説明をしていますが、声が小さくてよく聞こえないことだった。茶室はそんなに広くなかったけれど、お湯の沸く音で聞き取りづらかったのだろう。私たちも半東をやった後、「よく聞こえなかった」とお互いに反省したことがあったので、これから気をつけていこうと思う。

最後に、北方文化博物館新潟分館で新潟大学茶道部のお茶席に参加した。流派は裏千家である。先に表千家で泡立っていないお茶を飲んだので、裏千家の泡立っているお茶を飲むと、少し安心した。北方文化博物館新潟分館のまわりも紅葉していて、とてもきれいだった。

県内の大学の様々な流派のお茶席に参加できて楽しかった。また今年も開催されるならお茶を飲みに行きたいし、機会があれば主催者側として参加してみたい。

○ クリスマス茶会

〈概要〉

2012年12月26日(水曜日)に本学和室でクリスマス茶会を開催した。クリスマス茶会は、今までの茶道部の活動で開催したことがなく、今回が初めてだった。しかも、1・2年生が主体となって茶会を計画することがあまりなかったので、茶会に使う道具やお客様にお出しするお菓子などをどうすれば良いのか、同輩と後輩に何回もミーティングしたり、先生と相談したりして茶会の計画を立てた。

茶碗は、トナカイの絵の茶碗と、雪が降っている街並にサンタクロースがいる絵が描かれた茶碗を使った。その他に、当時の2年生が1年生の時に陶芸教室で作った茶碗を使った。床には掛軸の代わりにクリスマスリースを飾り、香合の位置にマトリョーシカの置物を置き、床の中央には、天使の置物を置いた。花入れは学生が広告紙とラッカーで作ったものを使い、花はクリスマスの時期に見るポインセチアを生けると、ブーツにポインセチアを生けたようになった。そこで、そのブーツに赤いリボンをかけるとぐっとクリスマスムードが高まった。お茶の席の入り口を仕切るついでには、クリスマスらしくリボンを飾りつけた。

茶会には、以前大学で茶道を指導してくださった中澤先生とその先生のお友達、部活のOG、事務職員をお呼びした。最初にあられ香煎(昔、遠方からわざわざお茶を飲みにお越しになったお客様にお出ししたもので、もち米で作る小さいあられが入った茶碗に湯を注いだ飲み物)をお客様にお出しして、続いてお菓子とお茶を差し上げた。

〈感想〉

今までの茶会では、先生や先輩の指示に従って準備などを行っていたが、今回は1、2年生が主体となって茶会を開催した。そこで、自分たちで茶会を計画して開催することの大変さを実感した。茶会で使う道具から、お菓子とお茶を運ぶ役を誰がするのかなどの決め事がたくさんあって、苦労した。道具立てでも花と掛け軸を決めるのに苦労した。掛け軸は先生に相談したら、掛け軸ではなくクリスマスリースを掛けてみればよいのではないかとアドバイスされた。床にクリスマスリースを掛けたことがないので、果たして馴染むのだろうかと思ったが、思いのほか馴染んだので驚いた。お越しになったお客様にも好評で、「床にクリスマスリースが飾ってあって面白い」などの声を頂いた。お越しになったお客様が席を楽しんでくださったので良かった。クリスマスと茶道というと、洋と和で合うのかと思っていたけれど、席のレイアウト次第でこのような良い席になるのかと驚いた。

〈課題〉

- 1 ものを見る感性を育てる

2 茶会を企画して実践できるようにする

1 ものを見る感性を育てる

今回、お茶会で使う道具を探している時、「どの茶碗が今回のお茶会に適しているのか」や、「この道具は学校にないから、家で代替できるものはないか」と考えていた。また、お店で買い物をしている時、「この道具はもしかしたら茶道のちょっとしたお茶会の道具にできるかもしれない」などと発見できるようになると、そういうものを探すのが楽しくなるし、自分の、ものを見る感性が成長していくだろう。今後の茶会では、ものを見る感性を育てていきたいと考えた。

2 茶会を企画して実践できるようにする

自分たちで企画し茶会を開催することで、茶会を行うまでの段取りを知ることができて、とても勉強になった。この茶会を通して、部員たちで協力して達成感を得ることができたが、道具を決めるのが直前であったため、あわててしまったところがあったので、今後は余裕をもって計画する。2013年度は、新1年生と2年生にクリスマス茶会を頑張っって企画してもらいたい。

◎ 初釜

〈概要〉

2013年1月12日（土曜日）に本学和室で初釜を開催した。初釜とは、その年に初めて行われる茶事である。茶事とは、濃茶や薄茶とお菓子をいただくほか、懐石（食事）や炭点前が組み合わされた形式である。炭点前は、学校の防災上火を使用することが禁止されているので、残念ながら、できなかった。最初に懐石をいただき、その後濃茶と薄茶をいただいた。濃茶は、人数分の濃茶用の抹茶を1つの茶碗に練った濃いお茶で、回し飲みをする。茶事の主要な喫茶である。濃茶は今井先生に練っていただいた。薄茶は、当時4年生だった斎藤美如先輩に点ていただいた。薄茶で使った茶碗は、鶴や、竹などの縁起の良いものが描かれた茶碗を使用した。棗（抹茶を入れる器）の蓋には、亀の絵が描かれてあった。茶碗や棗、柄杓、蓋置を飾った棚は寿棚である。この棚は淡々斎のお好みで、上の段は八角形で下の段が四角形になっている。蓋置はお好みの蓋置で、水指は京焼のものである。

床は、鶴が空を飛んでいる風景が描かれている短冊が掛けてあった。床の間に結び柳が飾ってあった。結び柳とは、初釜の床飾りで柳の枝を曲げて輪に結び、床の釘に掛けた青竹などの花入れから長く垂らしたものである。香合は、六角形で、うろこ紋が描かれていた。香合は、中に香を入れておく小さな器である。風炉の時期は木地や塗り物の香合を使い、炉の時期は陶磁器の香合を使う。

〈感想〉

初釜は一年の始まりに一回しか行わない茶事なので、気を引き締めて運びや半東をした。普段私たちが行っている茶会は喫茶のみで、懐石からの茶事を行ったことがあまりなかったので、懐石をどうやってお客様にお渡しするのかなどの作法を勉強することができた。同時に、茶事を行うようになるためには、懐石料理作りから道具の取り決め、茶室の掃除まですべて自分で

やらなければならないことを知り、茶事の開催における苦労も学ぶことができた。

私は、今後1年間気を引き締めて茶道の稽古に励もうと思った。今年からは、2年生が主体となって茶道部を引っ張っていくので、しっかりしなければと責任を感じた。

〈課題〉

道具に興味を持つ

私は、茶会の当日になって、茶会で使われる道具を茶道の先生に聞いてメモしている。しかし、その道具の名前を覚えてだけで、その道具はどのような道具なのか、どのような方法で作られたのかなどの詳細を知ろうとせず、ただ茶会の時に「このお茶碗は〇〇が作った茶碗です。」と言うだけで終わってしまったことが多かった。今考えてみると、それはもったいないことだと思った。茶会では同じ道具を使うことはあまりないので、その道具はその茶会限りでお別れになってしまう。道具の気持ちを考えてみると、何もアピールされないまま自分の役割を終えてしまってかわいそうである。今度からはそのようなことがないように、インターネットや書籍などを使って道具について調べて、席中で詳しく説明できるようにしたいと考えた。

◎ 送別茶会

〈茶会の概要〉

2013年3月23日（土曜日）に本学和室で茶道部の送別茶会を開催した。今年度は4年生の齋藤美如先輩が本学をご卒業されるので、送別茶会を開催し、卒業の門出を祝福した。2年生が主体となって、送別茶会に使用する道具や、先輩やお客様をもてなすお菓子などを決めた。当日は3年生の先輩や1年生の後輩にお手伝いをお願いして、一緒に送別茶会を盛り上げた。

今回は送別茶会の主役、齋藤美如先輩の他に、以前本学で茶道を指導して下さった中澤文枝先生と、その先生のお弟子さんとOGの方をご招待した。

今回の茶会も茶事の形式に沿って行われた。懐石は、茶道の今井先生のお知り合いの方からいただいた赤飯をお出しした。その後、濃茶と薄茶を2年生がそれぞれ点でて、最後に齋藤美如先輩が、学生時代最後の点前をした。そして、点前が終了した後、齋藤先輩に花束と帛紗と、部員・先生からのメッセージが書かれた色紙を贈った。また、日々の茶道部の活動や稽古を指導して下さっている今井先生と、顧問の小川先生に、感謝の気持ちを込めて花束を贈り、送別茶会が終了した。

〈感想〉

送別茶会の計画については、以前のクリスマス茶会で企画から開催までの段取りで失敗したことや学んだことを考慮して計画したので、スムーズにできたと思う。ただ、送別茶会当日の準備や茶会の進め方などの動きは鈍かった。お客様を待たせないように、素早く行動できるようにしたい。

濃茶の点前は私（山田絵美）がした。濃茶の点前は2013年3月14日から17日まで行われた裏千家学生セミナーでも業躰先生から指導を受けたのだが、裏千家学生セミナーで指摘されたことを活かした点前ができなかった。今振り返ってみると、裏千家学生セミナーで業躰先生か

ら指摘されたことで頭がいっぱいになって、緊張してしまったのだと思う。今後、緊張してしまいそうな時は、深呼吸して肩の力を抜いて望むようにしたい。

今年度本学をご卒業された斎藤美如先輩は、茶道部に全力を注いで活動されていた。部長としてのリーダーシップを上手くとっていたし、茶道のことから大学の講義のことなどまでの大学生活に関して部員にアドバイスして下さった。裏千家学生セミナーに行くための特訓の時には、厳しいこともおっしゃったが、私たちのために茶道部が繁栄していくように熱心に活動されている姿を見て、私は素晴らしいと感じた。また、先輩はいつも自信を持って行動をしているので、ぜひ見習いたいと思った。

〈課題〉

先輩から学んだことを受け継ぎ、後輩へ遺す

茶道部の学外での活動は、昨年度より今年度の方が活動の幅が広がってきた。それは、私たちが入学する前からの茶道部の先輩たちが、日々茶道部の活動に熱心に取り組んできた結果だと思う。私たちは、先輩が頑張って積み重ねてきた活動を引き受けて、さらに後輩へ引き渡さなければならない。私たちが後輩に、茶道部の活動を引き継げるような指導をしないまま卒業してしまうと、今までの先輩たちが積み重ねてきた取り組みが水の泡になる。また、後輩もどのように茶道部の活動をしていけば良いのか分からなくなる可能性もある。私たちは現在3年生で、これから就職活動で忙しくなる時期に入るので、後輩に指導する時間が限られてくるだろう。これからの稽古の時間を大切にして、後輩のためにより充実させていくようにしたい。

● おわりに

学生の記録からも知られる通り、学生が茶会に客として参加することは一人でもできるが、茶会を開くことは、能力のある学生の一定の人数の確保が必要である。さらに、外部での開催ともなれば、道具立ても相当のものが必要で、どうしても外部の先生方の手助けが必要となる。そのような環境にも比較的恵まれているのが現在の長岡大学茶道部で、2013年度も年度初めから茶会の開催が続いている。10月25日までに開催されたものを簡単に紹介しておく（七夕茶会など、内部のものは除く）。

- ① 4月14日、「茶道裏千家淡交会中越支部春の淡交茶会」の3席のうち、1席を担当した。会場は、「かも川別館」(新潟県長岡市柏町)。諸先生方の水屋手伝いのほか、卒業生の吉田真実さんと、ちょうどユニオン・ツールの中国支社から出張で来日していた成智美さんの手伝いもあった。
- ② 7月20日、「まちなかキャンパス長岡」(長岡市大手通)を会場に茶会を開催(呈茶)。本学の広報活動の一環として行った。3回目である。
- ③ 9月28日、新潟県立近代美術館(長岡市)で呈茶。同美術館20周年の記念イベントの一環として、20歳前後の若者に茶会(呈茶)をしてほしいとの依頼を受けて、内藤敏樹学長

の許可のもとに行った。

- ④ 10月20日、長岡大学を会場に「学生生徒・交流茶会」(学校茶道連絡協議会主催)が行われた。

以上のうち、②③④の茶会は御園棚を使って立礼で行った。この御園棚は、茶道部に今年初めて買った道具で、②が、外部の茶会での使い初めであった。

今年4月、今井先生から、中古で上質の御園棚が茶道具屋に出ているという情報を得、部費で買うには高額であったため学長に購入願いを出したところ、一クラブだけに公費は使えないが、半額分を個人的に寄付するというご返事をいただいた。残る半額は学内の篤志家をご寄付くださり、ようやく購入することができた。川瀬表冠(3代目)という作家のものである。この喜びを後世の学生にも伝えたく、ここに記しておくことにした。

「たかがクラブ活動」にも盛衰がある。だからこそ、今を大切に活動したいのである。

最後に、皆様方にこれまでの御礼を申し上げるとともに、今後とも御指導御鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

◎ 2012年度活動実績

1. 学内での活動 (本学1号館3階和室で開催)

日 時	記 事
7月25日(水)	納涼茶会
10月27日(土)~28日(日)	悠久祭茶会
12月26日(水)	クリスマス茶会
1月12日(土)	初釜
3月23日(土)	送別茶会

2. 学外での活動

日 時	記 事	場 所	備 考
5月13日(日)	第10回朝日茶会（朝日酒造株式会社主催）に参加	新潟県長岡市越路町 <ul style="list-style-type: none"> • 松籟閣 • もみじ園 • 朝日酒造本社エントランスホール 	
6月9日(土)	長岡大学まちなかキャンパス茶会を開催	新潟県長岡市大手通 まちなかキャンパス長岡	長岡大学の広報活動の一環
8月5日(日)	杜々の森名水茶会にボランティアとして3名参加	新潟県長岡市西中野俣 杜々の森名水公園	
9月30日(日)	長岡市民茶会に参加	新潟県長岡市 <ul style="list-style-type: none"> • アトリウム長岡 • ホテルニューオータニ長岡 • 互尊社 	
10月6日(土) ～7日(日)	茶道裏千家淡交会青年部北信越ブロック大会に4名参加	新潟県長岡市 <ul style="list-style-type: none"> • アトリウム長岡 • 長岡グランドホテル 	
11月11日(日)	学生・生徒交流茶会（茶道裏千家淡交会中越学校茶道連絡協議会主催）に参加	新潟県長岡市台町 ホテルニューオータニ長岡	
11月18日(日)	平成24年度第50回学生茶会に5名参加	新潟県新潟市 <ul style="list-style-type: none"> • 北方文化博物館新潟分館 • 旧齋藤家別邸 • 砂丘館 	

3. 外部セミナーへの参加

日 時	記 事
7月12日(木) ～15日(日)	第24回裏千家学生セミナーに2名参加 場所：京都府京都市裏千家各教場 <ul style="list-style-type: none"> • 茶道会館 • 裏千家学園茶道専門学校
10月21日(日)	裏千家学園茶道専門学校主催「大学生による裏千家茶道ビギナーズセミナー」に1名参加 東京道場（東京都新宿区市谷）
3月14日(木) ～17日(日)	第25回裏千家学生セミナーに4名参加 場所：京都府京都市裏千家各教場 <ul style="list-style-type: none"> • 茶道会館 • 裏千家学園茶道専門学校 • 平成茶室（今日庵敷地内）

朝日茶会 5月13日



エントランスホール ガラスの蓋置



エントランスホール 茶碗



エントランスホール 水指

まちなかキャンパスお茶会 6月9日



茶会の様子
点前:外山明代(2年) 半東:住谷瞳(3年)



茶会の道具
(銀瓶・茶碗・茶筥・茶杓・茶巾・棗・盆)

納涼茶会 7月25日



和室内の茶席の様子
点前:山田絵美
客:茶道の諸先生

長岡市民茶会 9月30日



茶会后、ホテルニューオータニ長岡のロビーにて。左から、斎藤、住谷、古田島、山田、田村、外山

裏千家淡交会青年部 第45回北陸信越 ブロック会員大会 10月6日・7日



左から、住谷、斎藤、古田島、外山



受付の様子と笹飾り

学生・生徒交流茶会 11月11日



点前:斎藤美如(4年)
客:小学生

悠久茶寮 10月27日・18日



掛軸「秋空雁一聲」(しゅうくうかりひとこえ) 芳賀幸四郎筆



桑小卓(くわこじょく) 総飾り
香合(鼻)



集合写真 前列左から、住谷瞳(3年)、小川先生(顧問)、今井先生(茶道指導)、外山明代(2年)後列左から、斎藤祥(1年)、松川貴之(3年)、山田絵美(2年)、田村理恵(2年)、古田島夏希(2年)



秋泉棚の総飾り

平成24年度 第50回学生茶会

11月18日



長岡技術科学大学茶道部の茶道具
左から茶碗、茶杓、棗



集合写真：北方文化博物館新潟分館にて

左から
山田 絵美 (2年)
斎藤 美如 (4年)
古田島 夏希 (2年)
田村 理恵 (2年)
外山 明代 (2年)

クリスマス茶会

12月26日



茶会の様子 (棚は更好棚)
点前：外山明代 (2年)
正客：佐藤咲子先輩 (2011年度卒業)



床の様子
正面にクリスマスリース
左から花入、天使の置物、マトリョーシカの置物

初釜

1月12日



寿棚の総飾り



集合写真

前列左から
小川 幸代 (顧問)
今井 憲子 (茶道指導)

後列左から
熊 浩 (1年)
田村 理恵 (2年)
山田 絵美 (2年)
外山 明代 (2年)
古田島 夏希 (2年)
斎藤 美如 (4年)

送別茶会

3月23日



斎藤美如先輩のお点前



集合写真

前列左から
小幡 陽生 (2年)
今井 憲子 (茶道指導)
斎藤 美如 (4年)
小川 幸代 (顧問)
山田 絵美 (2年)

後列左から
田村 理恵 (2年)
古田島 夏希 (2年)
熊 浩 (2年)
外山 明代 (2年)
西巻 省吾 (3年)

ブックレット既刊号のご案内

〈長岡大学ホームページ <http://www.nagaokauniv.ac.jp> でもご覧いただけます〉

- ① アタマは鍛えれば強くなる 原 陽一郎
- ② 授業評価の実態 -学生満足度の高い授業とは- 平野 順子
- ③ ニートとフリーター -揺れる若者の選択- 玄田 有史 兒嶋 俊郎
- ④ 2005長岡大学「起業家塾」 原 陽一郎 原田 誠司
- ⑦ 現代GPシリーズ1 情報力を鍛える -長岡大学における情報リテラシー・資格教育- 村山 光博
- ⑧ 現代GPシリーズ2 長岡大学教育プログラム
- ⑨ 現代GPシリーズ3 長岡大学教育プログラムⅡ
- ⑩ 現代GPシリーズ4 第3回 長岡大学文化講演会特集 第Ⅰ部 若者の社会人基礎力を鍛える -若者自立の教育を考える-
- ⑪ 現代GPシリーズ5 2006長岡大学「起業家塾」 原 陽一郎 原田 誠司
- ⑫ 夢をかなえる長岡大学の教育プログラム -平成19年度、環境経済学科・人間経営学科がスタート-
- ⑭ 長岡大学教育プログラムⅣ 学生公募型人間力育成プログラム -プロジェクト型自主活動とリーダー育成-
- ⑮ 長岡大学教育プログラムⅤ 長岡地域産業活性化のためのMOT教育 -イノベーション人材養成プログラム-
- ⑯ 現代GPシリーズ6 長岡大学教育プログラムⅥ 学生による地域活性化提案プログラム -政策対応型専門人材の育成-
- ⑰ 現代GPシリーズ7 いま、なぜ大学改革か …21世紀の新しい大学像は 原 陽一郎
- ⑱ 現代GPシリーズ8 第4回 長岡大学文化講演会特集 第Ⅰ部 脳科学と教育-21世紀の新しい教育を考える-
- ⑲ 現代GPシリーズ9 2007長岡大学「起業家塾」 原田 誠司
- ⑳ 現代GPシリーズ10 学生による地域活性化提案プログラム -政策対応型専門人材の育成- 平成19年度成果報告
- ㉑ 現代GPシリーズ11 情報力を鍛える -長岡大学における情報リテラシー・資格教育- 村山 光博
- ㉒ 現代GPシリーズ12 第5回 長岡大学文化講演会特集 若者の自立支援とキャリア教育 宮本みち子
- ㉓ 現代GPシリーズ13 学生による地域活性化提案プログラム -政策対応型専門人材の育成- 平成20年度成果報告(概要)
- ㉔ 「米百俵の精神」と長岡大学 原 陽一郎
- ㉕ 資格検定ガイドブック
- ㉖ 学生の3つの就職力一体形成支援プログラム
- ㉗ 現代GPシリーズ14 平成21年度地域活性化GPプログラム 学生による成果発表会(概要)
- ㉘ 現代GPシリーズ15 社会人基礎力育成グランプリ出場報告
- ㉙ 現代GPシリーズ16 学生による地域活性化提案プログラム 平成19年度～21年度活動報告(概要)
- ㉚ 長岡大学イノベーション人材養成講座 平成19～21年度成果報告書
- ㉛ 長岡大学のグローバルスタディ -21世紀の基盤精神「グローバルマインド」を身につける学習プログラム-
- ㉜ 大学とはどういうところか? -高校生の進路選択のために-プログラム-〈2010年版〉
- ㉝ 楽しもう! 越後長岡「まちの駅」 ~長岡大学鯉江ゼミナール 地域活性化への取り組み~
- ㉞ 長岡大学のキャリア教育 平成21～23年度「学生の3つの就職力一体形成支援プログラム」
- ㉟ 旧神谷信用組合を活用したコミュニティ活性化(平成22年度) 高橋治道ゼミナール
- ㊱ 企業の情報発信とホームページの役割(平成24年度) 村山光博ゼミナール
- ㊲ 長岡地域<創造人材>養成プログラム -「地域で役に立ち、頼りになる大学」をめざして-

長岡大学ブックレット ③⑧

【発行日】平成26年1月10日
【編集】長岡大学ブックレット編集委員会
【発行】長岡大学
〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8
TEL.0258(39)1600(代) FAX.0258(33)8792

長岡大学 茶道部茶会



 長岡大学

 まちなかキャンパス長岡
MACHINAKA CAMPUS NAGAOKA

 6月9日(土)

 13:00~16:00

無料です。

お気軽にご参加ください。



長岡大学ブックレット